

# 憑依する悪霊

## —軍記物語の天狗と怨霊に関する試論—

佐伯真一

はじめに

「天狗」なる存在が、日本のさまざまの文献にさまざまな姿で登場することは周知の通りであり、既に多くの研究がある。だが、従来の研究は、どちらかと言えば、『今昔物語集』や『天狗草紙』等によって、「反仏法」の存在として天狗を捉える方向を中心としてきたように思われる。筆者も、そうした視点からの豊かな成果に学んできたし、それに異論があるわけではない。だが、「天狗」の像は時代や文献によって実に多様であり、一つの視点のみから分析し尽くすことは困難であると思われる。筆者は先に、源頼朝が後白河院を「日本第一天狗」と擲論したという著名な話の解釈について論じ、問題の文言は、「行家・義経の謀叛は、『天魔』が憑依したのではなく、某『天狗』に操られたのである」というあてこすりであるかと考えた。その際に感じたことは、平安末期から中世の文献において、「天

狗」は、しばしば「天魔」と重なる憑依する悪霊であること、しかし一方、現在の文学や史学の研究において、そうした側面が必ずしも強く意識されていないことであつた。こうした側面からの分析で「天狗」の全体像を捉え得ると考えているわけではないが、軍記物語などに登場する「天狗」については、憑依して人を操る悪霊としての性格が重要であると思われるのであり、また、「天狗」の全体像なるものがあまりにも多面的であることを考えれば、そうした側面にしぼつた考察も有効な面があると思うのである。同時に、憑依して人を操る悪霊という性格は、「怨霊」の問題としても、平安期に比べて、中世により顕著に見られるのではないかと思われる。そのような悪霊として「天狗」と「怨霊」が結びついている様態は、『保元物語』から『太平記』までの軍記物語に通底する世界観に関わる問題として把握できるのではないか。小稿は、そのような問題意識に基づき、ごく粗い試論である。

## 一、崇徳院と「天狗」怨霊

寿永二年の暮、後白河院のたてこもる法住寺を義仲が攻めた法住寺合戦を、慈円は次のように評した

イカニモくコノ院ト木曾ト御タ、カイハ、天狗ノシワザウタガイナキ事也〔愚管抄〕卷五。岩波旧大系二六一頁。法住寺合戦を「天狗のしわざ」と見る点は、合戦直前の状況を記した『玉葉』寿永二年十一月十六日条の、「今夕所々堀堦構釘拔、別段之沙汰云々。此事天狗之所為歟」や、『平家物語』諸本の「延慶本第四〇卷八、廿五・木曾法住寺殿へ押寄事」にも共通し、『吉記』同十八日条の「偏是天魔之結構也」にも類似して、これが慈円の孤立した感想ではなかつたことがうかがえる。

だが、この事件は同時に、保元以後の戦乱を総括する形で「偏是讃岐院怨霊之所為歟」〔吉記〕同十九日条）とも評された。そして、慈円は、法住寺合戦の翌年に行われた崇徳院・頼長への追号について、

コノ事ハ、コノ木曾ガ法住寺イクサノコト、偏ニ天狗ノ所為ナリト人ヲモヘリ。イカニモコノ新院ノ怨霊ゾナド云事ニテ、タチマチニコノ事出キタリ（同前、二六三頁）

と記す。法住寺合戦の原因となつた「天狗ノ所為」とは、そのまま「新院ノ怨霊」の所為でもあるという認識が、ここに示されている。「天狗」は「怨霊」と重なり合う、ないしは連動する存在であるといえようか。

中世において、「天狗」が「怨霊」或いは「天魔」や「物の怪」等々と重なる存在であることはよく知られているだろうが、崇徳院の場合、「怨霊にして天狗」という形象には、特にふさわしい人物という感もある。これもよく知られた、『保元物語』諸本や『平家物語』の読み本系諸本に記された、崇徳院怨霊生成の物語に、天狗と化する崇徳院が描かれているからである。五部の大乘経を都近くに置くことを断られた崇徳院は、

○生ナガラ天狗ノ御姿ニ成セ給テ（半井本「保元物語」。  
金刀比羅本もほぼ同）

○只今に天狗にも成出させ給ぬと見へたり（鎌倉本「保元物語」。大乘経の件無し）

○生ながら天ぐのかたちにならせ給ひて（長門本「平家物語」）

○生ナガラ天狗ノ兒ニ頭レ御座ケル（源平盛衰記）  
○乍生現ニ天狗質（源平闘諍録）

等と描かれる。もつとも、延慶本「平家物語」は、「御ケシモメサズ、御爪ヲモ切セ給ハズ、柿ノ頭巾柿ノ御衣ヲ召ツ、…」と、修行者風の異形の風体には描くものの、「天狗」の語を用いておらず、水原<sup>3</sup>はこれを古態と見るのだが、筆者は、この説話に当初から天狗化が描かれていたとしても不自然ではないと考える。『保元』『平家』諸本の先後関係の議論に立ち入る余裕はなく、また、そうした議論に踏み込んだところで、いずれかの形を古態と証明することはおそらく不可能だが、「天狗化」

が描かれる所以は、修行者姿からの連想や、天狗を祭るといふ愛宕山への呪咀の祈祷との関連ばかりではなく、崇徳院が怨霊となつて世を乱すという展開に関連づけて読むことも可能と見るからである。

【平家物語】諸本や、【保元物語】の半井本・龍門本・流布本では、崇徳院は清盛に憑依して世を乱したとされる。原水民樹が指摘するように、この説話において崇徳院怨霊が清盛に憑依して起こさせた事件とは、諸本に揺れはあるものの、治承三年の政変、いわゆる清盛のクーデターとするのが【平家物語】としては本来の形だろう。しかし、事件当時の世評から言えば、崇徳院怨霊のしわざとするのにより適切なのは、むしろ右に見た法住寺合戦であつたはずである。崇徳院怨霊の発動として治承三年の政変を選んだのは、「清盛の悪行」という、【平家物語】全体の根幹に関わる問題を、崇徳院の霊の憑依によつて説明しようとする、物語の意志であると見るべきだろう。そして、そのような選択を可能とした背景として、現世の成り行きを悪霊の憑依によつて説明するという発想が既に熟していて、物語として使いこなせるものであつたこと、また、乱世の背景に崇徳院の霊を見るという発想が、当時の社会に広く存在したことなどを考えておくべきだろう。そうした発想は【太平記】にも受け継がれてゆく。

これも周知の記事だが、【太平記】（流布本）巻二十五「宮方怨霊会六本杉事」や、巻二十七「雲景未来記事」には、天狗

達が集まつて世を乱す評定をする様が描かれる。天狗の正体は、前者は後醍醐天皇を中心とした宮方の怨霊達であり、後者は崇徳院を中心とした歴代の天皇や高僧達であつた。【平家物語】の「物怪沙汰」において、日本の神々が集まつて世を治める議論をするように、【太平記】三部世界では、〈天狗〓怨霊〉が集まつて、世を乱す相談をする。世を乱すとは、具体的には、前者の場合、護良親王が直義の子として生まれ変わり、峯僧正春雅は妙吉侍者の心に、智教上人は上杉・畠山の心に、忠円僧正は師直兄弟の心に、それぞれ入れ替つて戦乱を仕組むというものであつた。【平家物語】における崇徳院怨霊が、正体も狙いも必ずしも明らかではなく、えたいの知れない悪霊としての恐怖の感覚を残しているのに対して、【太平記】のこれらの怨霊は、明確・具体的に物語の展開を指示している。そのような〈天狗〓怨霊〉の中心に座つているのが崇徳院であつた。それは、【保元物語】から始まる崇徳院観、〈天狗〓怨霊〉観を、【太平記】が完成させたものといつてもよいだろう。

## 二、憑依する天狗

さて、右のような崇徳院怨霊の形象に代表されるような、憑依する〈天狗〓怨霊〉というイメージは、どのように形成されてきたのだろうか。まずは、憑依する天狗について検討したい。

前記注2の別稿でも述べたが、【日葡辞書】が、「つき(Tyutji)」の項に「天狗が人につく」、「とりつき(Torigang)」の項に「天狗が人にとりつく」の例文を挙げるように、憑依するのは天狗

の重要な属性であった。それは、「愚管抄」巻六に、「野干天狗トテ人ニツキ候物」（旧大系・九二頁）とあることによつて、中世を通じて存在した觀念と見てよからう。「愚管抄」の記事は、直接的には仲国夫妻の託宣事件に関する批評だが、「愚管抄」の記す天狗の憑依が、単に人の口を借りて託宣するだけではなく、人に狂った行動をとらせるものであることは、先に見たとおりである。「玉葉」「明月記」や「平家物語」における「天狗」の用例も、ある程度、そのような視点から説明できるものを含む。たとえば、「玉葉」では先に引いた法住寺合戦への批評の他、治承四年三月十七日条、園城寺等の衆徒が法皇・上皇を盗み出す計画に対する「此事偏天狗之所為也」等、また、「明月記」建保元年十月二十一日条、清水寺法師が登山して天台末寺になろうと所望したという事件に対する「天狗之所存歟」等といった批評は、天狗が人の意識を狂わせていると見た例といえよう。延慶本「平家物語」では、先に引いた法住寺合戦の知康の例の他、第一末・十八（教訓状）では、清盛の衣の隙間から鎧が見えた場面で、重盛が「穴口惜、入道殿<sub>ニ</sub>能<sub>ク</sub>天狗付タリケリ」と思ったとか、第二本・二（天狗問答）では、「六十余州ノ天狗共山門ノ大衆ニ入カワリテサシモ目出<sub>キ</sub>前加行ヲモ打サマシマヒラセテ候也」、第二末・七（文覚被流）では、「見聞人ハ皆、文学ハ天狗ノ付テ物ニ狂カナト申アイタリキ」というように、天狗が人に「付き」、「入カワ」つて奇矯な行動をとらせるといふ例が多い。

では、そのような天狗の性格は、どのようにして形成されたのだろうか。大隅和雄等が指摘するように、「愚管抄」に顕著に見出せる冥顯二元の世界観、冥界からの働きかけによつて顕界たる現世が動いているといった認識が、人間の行動を悪霊の憑依によつて説明する傾向と結びつきやすいことは、前提として認めておかねばなるまい。また、乱世の世相と星宿信仰の結びつきを説く水原一の指摘は、乱世の背景に「天狗」を見る思考の一面を鋭く突いたものとして、興味深い。だが、ここではとりあえず、「天狗が憑く」ことについて考えてみよう。

山根對助は、「憑きものとしての天狗の性格」について検討し、「小右記」長元三年九月廿五日条の、天狗が人に憑いて叡山に關する予言をした記事や、「大鏡」の三条天皇の眼疾の描写、また、「続本朝往生伝」の遍照伝所見の天狗の託宣などに注目して、中国の文献に見える「天狗」とは性格の異なる、日本なりの「天狗」像の展開であるとしている。注目すべき指摘だが、「大鏡」の、天狗が三条天皇の首に乗つて羽で目を覆い隠したという記事や、人に憑依して託宣するという類の話題は、小稿で見えてきたような、人に憑依して意識を狂わせ、あらゆる行動をとらせるといった事柄とは、「とりつく」という言葉において共通するとしても、いささか性格を異にするのではないか。また、「大鏡」等の「天狗」は怨霊との近さを感じさせるが、怨霊に近い「天狗」は、小峯和明が指摘するように、「今昔物語集」では、巻一〇・第三四話「聖人犯<sub>レ</sub>后蒙<sub>レ</sub>國王咎<sub>レ</sub>成<sub>レ</sub>天狗

「語」にも見られる。さらに、「天台南山無同時建立和尚伝」（相応和尚伝）や「拾遺往生伝」等に見える、染殿后にとりついた真済の説話も、怨霊に近い「天狗」といえよう。だが、「相応和尚伝」等では真済ニ天狗が后にとりつくさまは具体的には描かれず、「善家秘記」系の「紺青鬼」説話を受け、本文中には「鬼」の語を用いる『今昔物語集』巻二〇・七「染殿后为天宮被嬖亂」語もまた、后の意識を狂わせる話ではあるが、后とむつみ合う鬼を描き出す想像力は、清盛に憑依する崇徳院などとは、やや異質というべきだろう。しかし、これらのような、ある個人に執拗にとりついて悩ませる天狗は、怨霊という性格も濃厚である点で、崇徳院の前史をなすものとして注意される。

さらに、『今昔物語集』巻二〇・六「仏眼寺仁照阿闍梨房託天狗女来語」は、仁照を惑わすことを狙つて天狗が「女メ託テ」近づこうとした話であり、ここで問題にしている憑依する天狗に近い。天狗が憑依して人を操るといふ認識は、既に成立していたことがうかがえるわけである。同時に、この話の天狗の目的が仁照を惑わそうとしたことであるように、天狗は、人を欺き化かし、特に仏道に進もうとする人の心を惑乱する存在であった。そのような、人を惑乱するという天狗の性格が、憑依という性格に結びついていったことは想像できよう。

その点で、天狗に重なってくるのが「天魔」である。前述の後白河院への「大天狗」との言葉や、法住寺合戦への批評でも、「天狗」と「天魔」が交錯するさまを見てきたが、人に憑依し

て世に深刻な害をもたらす悪霊として、「玉葉」「明月記」「吾妻鏡」等では、むしろ「天魔」の方がより重い存在であるといえそうである（注2別稿参照）。延慶本・盛衰記のいわゆる天狗問答では、たとえば、右の「天狗共山門、大衆入カワリテ」と同じ事柄が「日本、天魔アツマリテ山、大衆入カワリテ」とも表現され、或いは「八宗、智者ニ天魔、ナルカ故ニ是、天狗、申ナリ」といった言葉も見えて、「天魔」と「天狗」は交錯し、時にほとんど区別のつかない形で議論が展開される。

だが、仏教理論では他化自在天即ち第六天の魔王のことでありとされ、だとすれば、日本では大日如来ニ天照大神との間で国譲りの契約を行ったともいわれる、格の高い存在であるはずの「天魔」が、狐狸妖怪にも類する「天狗」と、これほど同視されるようになるのは何故か。さまざまの要因はあるが、筆者は、仏道を妨げるために人間の意識に働きかける、即ち人を狂わせる「魔」の性格が、天狗の性格と接していたことが、重要であると考えられる。仏教の正しい道へ向かおうとする人の心をかき乱し、狂った行動をとらせる一それは、正統な仏典の世界では「魔」「天魔」の所行だったと思われるが、日本では、平安後期頃には天狗がそうした領域に進出し、「魔」の一種として活動していたようなのである。同時に、天魔の側も、仏道への志を妨げるばかりではなく、世を乱す行動一般が「天魔の所為」とされるようになって、天狗との境界は二層不分明になっていったものであろう。かくして、天狗と天魔は混淆して渾然

一体となり、混淆するにつれて、人に憑依して世を乱す悪霊としての性格をますます強めていった。兩者の混淆の道筋を、このように考えてみたい。

だが、崇徳院を典型とするような、憑依する（天狗＝怨霊）の形成を説明するには、もう少し角度を変えた検討を必要とするようであり、次に、「怨霊」の側から考えてみよう。

### 三、憑依する怨霊

「怨霊」が恐れられたのはいつ頃からだろうか。一般には怨霊思想が盛んになったのは大まかに平安時代と説明され、井上内親王・他戸親王母子や、御霊会に祀られた六所ないし八所の御霊あたりが早い例とされるだろうが、より早く、長屋王の怨霊化を認める見解も、近年は有力となっている。「怨霊」の最古の用例は、『日本後記』延暦廿四年（八〇五）四月五日条、崇道天皇（早良親王）の鎮魂を命じた記事<sup>①</sup>。但し、ここでは当時の用語には必ずしも関わりなく、現代の操作概念として「怨霊」を用いる。いずれにせよ、初期の「怨霊」の祟りは、早良親王については、皇太子（平城天皇）の病（『日本後紀』延暦十一年六月十日条）、長屋王については、遺骨の流れ着いた土佐の百姓が多く死亡（『日本書紀』中・一）等が記される。井上内親王・他戸親王については、宝龜八年（七七七）十二月の改葬直前に記される天皇・皇太子の病が祟りかと思られるが、改葬直後に記される早魃も、『水鏡』に見られるように、怨霊に關連していたのかもしれない。このように、病や災害が発生

した時に、それを何らかの祟りと見て、祟りの主を卜して怨霊にたどり着く発想の原型は、『日本書紀』崇神天皇五十七年条所見の、疫病による大物主の祭祀に求めることもできよう。怨霊には、特定の個人に報いる側面もあるが、災害に対応して、その原因を求める形で見出されるという側面も、古くから重要だったはずである。

雷を中心とした災害から姿を見出されて、平安期に最も恐れられたのが、菅原道真の怨霊・北野天神であった。『扶桑略記』天慶四年（九四二）三月条所引「道賢上人冥途記」では、太政天（天神）自身が「我主一切疾病災難事」と述べ、それを敷衍するように、「満徳天」は、天神の眷属たる十六万八千の毒龍・悪鬼・水火・雷電・風伯・雨師・毒害・邪神等が、国土に遍満し、大災害を起こしていると述べ、清凉殿の落雷事件や醍醐天皇の崩御などにふれた上で、

又自余眷属勢力與彼火雷王同。或崩山振地。壞城損物。或吹暴風降疾雨。人物併損害。或行疫癘天死之疾。或令發謀叛乱逆之心。（国史大系二二二頁）

と述べる。あらゆる災害が道真怨霊のせいとされるのだが、ここでは最後の傍線部に、「謀叛乱逆之心」を起こさせるのも怨霊のしわざに含まれている点に注目したい。「謀叛乱逆」も災害であり、であるからには怨霊のしわざであり得たわけである。さらに、治承寿永の内乱の後に書かれた建久本「北野天神縁起」では、この部分に概ね該当する記述が、「純友将門の兵乱」や、

「貞任宗任が合戦、保元以後の騒動、源平二家のあらそひ」、或いは南都炎上などを含む形で具体化されているのである。

だが、怨霊が病を流行らせ、暴風雨や地震を起こし、或いは雷となつて仇敵を襲うなどといった事柄は想像しやすいが、怨霊が戦乱を起こすとはどのようなイメージされるのか。戦乱が、少なくとも直接的には現世の人々のしわざである以上、怨霊は人々に憑依するという形で介入すると考えざるを得まい（怨霊と戦乱の関係が常にそのように論理的に考えられているわけではないだろうが）。主要な災害として戦乱が意識されるようになった時代には、怨霊の祟り方もそれに対応して、人々に憑依して戦乱を起こさせるという形をとるようになったと見られるわけである。

とはいえ、北野天神の怨霊・災厄神としての本領は、やはり、火雷天神としての直接的な行動にあつただろう。『将門記』に天神の託宣が見出されるのは気になる点ではあるが、個々の戦乱について記す文献の側に、戦乱と天神の関連を説く例はあまり見出されない。人に憑依して戦乱を起こさせるというようなり方は、天神の祟り方として、中心的なものではあるまい。平安末期からそれにとって代わつた崇徳院こそ、戦乱が主要な災害と考えられるに至つた時代にふさわしい、怨霊の王者だつたわけである。

もちろん、憑依する怨霊が、戦乱のみによつて作り出されたはずはない。『栄花物語』や『大鏡』などでは、藤原元方及び

その娘祐姫の霊を中心に、人に憑依して意識を狂わせる「ものけ」がしばしば描かれる。たとえば、『栄花物語』一「月の宴」では、東宮（冷泉天皇）に「ものけ」即ち元方の霊が憑いて「ともすれば御心地あやまりしけり」などあり、同・二「花山たづぬる中納言」では、花山天皇の異常な道心が、冷泉院と同じ「ものけ」のしわざであるとされる。また、同・十「ゆふしで」では、退位を望む東宮（敦明親王）が、道長に「いみじかりし世の御もの、けなれば、それがさ思はせ奉るならむ」と反対され、これは、『大鏡』師尹伝にも同様の場面があり、冷泉院と同じ物の怪のしわざとされる。『栄花物語』には、藤本勝義が指摘するように、花山天皇などの道心を怨霊の憑依と描くことによつて、藤原氏の陰謀を覆い隠しているという面があるが、そうした手法が成り立つこと自体、人々の行動を怨霊の憑依によつて説明する発想が、既に熟していたことを意味しよう。もう少し広義の、先に天狗について見たような、「人にとりついて病を起こさせる」といった意味をも含めるならば、「とりつく怨霊」は、これらの歴史物語には実に多く描かれている。このような発想があつてこそ、怨霊が人に憑依して戦乱を起こさせるという考え方も可能となつたわけであろう。

そのような憑依する怨霊と、先に見てきた人の意識を狂わせる天狗―その両者が、主な災害として戦乱が意識される時代という基盤の上で結びつき、人々に憑依して戦乱をもたらす（天狗＝怨霊）が成立したのではないだろうか。

おわりに

天狗とは、怨霊とはそもそも何かという問いに対して、小稿は正面から答え得るものではない。また、軍記物語の範囲に限っても、天狗・怨霊の全体像には遠い。ただ、平安末期から中世にかけての天狗・怨霊について考える上で、憑依する悪霊という側面に注目することが一つの有効な視点であると考え、その形成について、素描を試みたものである。周知の資料を並べて、ごく粗い見取り図を描くに終わった点は忸怩たるものがあるが、自分なりの考察の一步としたい。

注

- (1) 代表的な論として、森正人「今昔物語集の生成」IV2 (和泉書院一九八六年。該部初出一九八五年)、小峯和明「説話の森」(大修館一九九一年)が挙げられよう。
- (2) 佐伯真一「後白河院と『日本第二大天狗』」(『明月記研究』四号、一九九九年一月)。
- (3) 水原一「崇徳院説話の考察」(『駒沢国文』七号、一九九六年六月)、『平家物語の形成』加藤中道館一九七一年五月再録)。
- (4) 崇徳院について「天狗」という形象を重視する見解は、山本ひろ子「魔界と怨霊―崇徳上皇」(『別冊歴史読本・臨時増刊・天皇家怨霊秘史』一九八九年六月)にも見ら

れる。但し、山本論文は、歴史を動かすエネルギーを天魔・天狗として形象化したと見、怨霊との差を強調するなど、小稿とは視点を異にする。

- (5) 原水民樹「清盛の悪行にかかわる夢想譚」(『徳島大学学芸紀要』人文科学第三〇巻、一九八〇年十一月)。なお、原水はこの問題を「治承物語」に関連づけて考えるが、筆者は、内容の知れない「治承物語」をことさらに持ち出す必要はないと思う。「平家物語」が世を乱す悪行を清盛の責任に帰してゆく傾向に関わるものと捉えたい。

- (6) 大隅和雄「愚管抄を読む」(平凡社一九八六年)。
- (7) 水原一前掲注3論文。

- (8) 山根對助「天狗像前史―今昔物語集へ」(『和漢比較文学叢書』八・和漢比較文学研究の諸問題)汲古書院・一九八八年)。

- (9) 小峯和明前掲注1書。

- (10) 細川涼一「謡曲『第六天』と解説房貞慶―貞慶の伊勢参宮説話と第六天魔王」(『金沢文庫研究』二八七号、一九九一・一〇)、『逸脱の日本中世』JICC出版局一九九三・三再録)、阿部泰郎「日本紀と説話」(『説話の講座』三 説話の場―唱導・注釈) (勉誠社一九九三・二)、片岡了「第六天魔王の説話」(大谷大学『文芸論叢』四四号、一九九五・三)、伊藤聡「第六天魔王説の成立―特に『中臣祓訓解』の所説を中心として」(『日本文



学」一九九五・七)等参照。

- (11) 『華嚴経』卷四二(大正九・六六三b)には、「魔」が人の心を乱す「魔業」の中に、「墜増上慢…軽蔑衆生」を挙げているが、これなどは、後に天狗の属性とされる事柄だろう。天狗が、天魔との混淆により、その性格の一部を引き継いだと見られようか。そうした面を明瞭に見せているという意味でも、延慶本・盛衰記の天狗問答は注目される。

- (12) 若林晴子「天狗草紙」に見る鎌倉仏教の魔と天狗(『絵巻に中世を読む』吉川弘文館、一九九五年)は、「今昔物語集」等により、「反仏教的な魔」としての天狗のイメージが、平安後期には確立していたとする。

- (13) 『三代実録』貞観五年(八六三)五月廿日条に、崇道天皇(早良親王)、伊予親王、藤原夫人(吉子)、觀察使(藤原仲成か)、橘逸勢、文室宮田麻呂の六所。「橘逸勢伝」には仲成に代えて藤原広嗣を記す。「拾芥抄」諸社根元記」等々に、吉備聖霊(吉備内親王か)、火雷天神(菅原道真)を加えた八所。

- (14) 寺崎保広「若翁」木簡小考(『奈良古代史論集』第二集、一九九一年一月)、辰巳正明「悲劇の宰相長屋王」(講談社一九九四年)、多田一臣「日本霊異記・中」(ちくま学芸文庫一九九七年)等。

- (15) この点、辞書類には用例としてあまりとられず、常識化

しているのかどうかを知らない。新谷尚紀「御霊と祟り」(『国文学解釈と鑑賞』一九九八年三月)に指摘あり。なお、「怨霊」は、諸橋「大漢和辞典」や「漢語大詞典」等に漢籍の用例が見あたらない。和製漢語である可能性がある。

- (16) 稲岡彰「怨霊思想と死刑停止」(早稲田大学大学院「法研論集」二六号、一九八二年五月)。

- (17) 柴田實「祇園御霊会―その成立と意義―」(民衆宗教史叢書「御霊信仰」雄山閣一九八四年)。

- (18) 右注14新谷論文は、「個人対個人の関係」を怨霊の始発の位置に据えるが、必ずしも賛成できない。

- (19) 「満徳天」は、永久寺本「日歳夢記」には金剛蔵王菩薩のこととされる。

- (20) 藤本勝義「源氏物語の〈物の怪〉」(等閑書院一九九四年六月)は、「采花物語」の花山天皇などの例について、霊の憑依と描くことが、藤原氏の陰謀を覆い隠している」と指摘する。

付記  
小稿は、一九九九年十一月の中京大学国文学会、また、同一二月の慶應義塾中世文学研究会で、講演形式で申し上げた話を原型としつつ、大きく書き改めたものである。貴重な機会を与えて下さった諸氏、また、席上、有益なご教示を賜った諸氏に感謝申し上げます。

(ささき・しんいち/本学教授)